

演劇ユニット京都怪演隊「父帰る・冬の朝」

劇団は<2015.7.>に結成とのこと。演劇経験者たちが集まっているらしいことは、舞台上での出演者たちの「発声」を聞いたら判る。しっかりと「声」が届いている。

題名どおり、『父帰る』のパロディを意図しているようだ。長らく入院していた「父」が戻ってくる。ただ、異なるのは、この一家は大金持ちらしく、用意した「シニアマンション」も豪華だ。それは舞台セットの「ソファ」で一目想像させる。通常の「部屋」と異なるのは、ソファ、テーブルなどなど、あらゆる場所に「ナースコール」が設置してあり、加えて、同居して世話をする「女性ケアマネージャー」がいることだ。こどもたちは兄と弟、そして妹の3人。兄は会社を弟に譲っているが、3人の仲は悪くない。

となると、「舞台」の変化は「身内の争い」ではなく、「父が帰る」までに訪れてくる。子どもたちの関知しなかった「父の関係者たち」とのやりとりになる。ただ、出演者たちの「配役」表記がないので、個々人についての意見は書けない。

父が、子どもたちにほとんど「自身」の生活を語ってこなかったことからくる、子どもたちがとまどう「父の客」との対応、だがこの程度からは、さほど舞台はコミカルになりにくい。従って、「こどもたち」役の演技のしどころが生まれてこない。それに、これらのエピソードでは、極く「場」が流れていく程度以上にはならない。誰が、どう対応して、どう戸惑い、どう困るのか、それが無い。

もっと様々な「場の変化」が欲しい。それがあってこそその「舞台」に活気が生まれ、観客にも興味が起こるのではないか。これだけでは、「舞台」進行の経過を観ているだけになってしまう。

それがあってこそ、ラストの「ケアマネージャーの女性が、父の再婚相手」、というオチも生きてくる。そうすると、この「ケアマンション」も「父」が準備したものになり、子どもたちに譲渡した以上に「父」は財産を貯えていたことになり、子どもたちには、金銭的な実害は出なくて、余裕の生活が始まるようだ。これでは、さして「子どもたち」には困った事態にはならない。「そうなのですか」で事態解決である。

これが例えばラストに、ケアマネージャーが、宣言と同時に何らかの要求を子どもたちに突きつければ、新たな事態が発生し、今後「子どもたちに困った事態が起こる」といった余韻が残るのだが。

今泉おさむ（日本演出者協会）